

「米国第2海兵師団撮影の熊本関係写真と映像 I」

11 / 12 版

高谷 和生

※くまもと戦争遺跡・文化遺産ネットワーク

I はじめに ～米国海兵隊の熊本への進駐～

アジア・太平洋戦争の終結後、我国には連合国軍が直ちに駐留し、通称「進駐軍」と称されていた。九州へは9月3日鹿屋地区に、10日には米国第5海兵軍団が佐世保に進駐した。その後に当軍団は佐世保に本部を置き、九州各県及び山口県主要都市に進駐した。

熊本には海兵第2師団(師団長ハント少将)第8大隊の二人の将校が、先遣隊として9月28日健軍飛行場に降り立ち、10月5日から12日までに連隊長マックファーランド大佐を長とする本体が進駐を完了した。主力は熊本市北区八景水谷の旧陸軍熊本幼年学校であり、他にも旧陸軍第六師団歩兵第十三聯隊跡他的大江地区旧各聯隊跡に駐留した。その後、駐留部隊は数回交代し兵員数も変化した。講話条約発行後も安保条約に基づき駐留を続け、昭和31年10月14日に撤収を開始し、キャンプウッドを米軍が引き渡したの10月14日であった。

これまで筆者及びくまもと戦跡ネットでは、敗戦前後の「混乱と苦渋にみちた空白の歴史」の実相解明に向けて、残された戦争遺跡や日本側証言、米軍資料を継続して調査(註1)している。

本稿では2021年3月に啓発リーフレット『進駐軍が見た熊本』として公開している「NCM長崎ケーブルメディア所蔵」映像と「長崎平和推進協会写真調査部会所蔵写真」の第一弾公開資料を紹介するものである。なお、同様に熊本撮影「昭和館」映像と「同写真 第二弾」公開資料については次回に報告する。



映像1 熊本(健軍)飛行場に駐機した「飛行第一七〇戦隊」の「四式重爆撃機“飛龍”列機」 背景は金峰山

※本映像は連続した広範囲の映像画面を繋ぎ合わせたパノラマ資料である。

※本映像はNCM長崎ケーブルメディア所蔵映像を、スクリーンショットで切り取ったカラー映像である。

II 進駐軍と海兵隊フィルム

1 海兵隊フィルム 映像とスチール写真

1995年羽仁進代表が主催する市民団体「平和博物館を創る会」では、戦後に米国海兵隊が撮影した長崎被爆惨劇の映像を入手しようと「10フィート運動」を全国に広げ、その成果として米国国立公文書館より16ミリカラーフィルム「1万6661フィート(3.25km)・約5時間・1121カット」の画像を入手した。ただ、この映像には音声は付いておらず、入手の経緯等からフィルムに関わる米軍資料の調査分析はなされていなかった。

その後、NCM長崎ケーブルメディアデレクターの吉村陽夫氏は、長崎原爆被害映像や長崎近郊映像を独自に分析して、その概要を「ながさき被爆記録全集 海兵隊フィルム」(註2)として番組で継続して紹介している。特に熊本関係映像は「ながさき被爆記録全集 第11回長崎県外の映像など」で放映された。以下「長崎ケーブルメディア映像」と略す。

また、東京都靖国神社近く九段下の日本遺族会が運営する「昭和館」(註3)でも独自に、米国公文書館より戦後映像を入手し、熊本関係映像については館内で「熊本の街並み風景 その他」として映像を紹介している。ただ、こちらも映像に関する調査分析はなされていなかった。以下「昭和館映像」と略す。

さらに、全国の空襲被害状況等をまとめた戦略爆撃調査団による調査内容は「戦後日本の原風景 本土最前線・九州」等に収録されているが、熊本県関係映像は現在の所は確認されていない。

長崎ケーブルメディア映像は、第1表に示す通りであり、長崎港・大牟田を含め映像時間は7分31秒、熊本関係は5分21秒である。

また、今回紹介するスチール写真は、米国国立公文書館に所蔵されている長崎原爆資料調査の過程で、「Nagasaki」銘と記載がなされているが「熊本関連」と想定される写真資料群である。本写真の

所蔵・調査は「公益財団法人 長崎平和推進協会 写真調査部会」が行っており、その総数は約4,000枚とされる。長崎市内撮影は約2,000枚で、熊本の他に佐世保も確認されているという。

本スチール写真は、本年5月9日同写真調査部会から本会が提供を受けたもので、内訳は、天草海軍航空隊・富岡水尻砲台他：21枚、菊池飛行場：26枚、菊池恵楓園：10枚、健軍（熊本）飛行場：38枚、三菱重工業熊本航空機製作所：8枚、三角港爆弾等投棄・米兵阿蘇登山・熊本駅・天使園・熊本市内各所他：99枚の「計202枚」である。また本写真群の撮影された期日は、1945（昭和20）年10月14日～1946年3月18日までの期間である。

なお、戦後撮影の米軍写真に関連する熊本県内資料としては、熊本日新聞社に「故 野田 衛氏（熊本市出身・ジャーナリスト）から「1985（昭和60）年に約240点」の寄贈を受けた情報ライブラリー所属資料がある。一部は特集「米軍記録 占領下の熊本 克明に」での紙面紹介（昭和60年7月12日～8月15日・29回）、展示会「終戦40年 熊本展」（1985年8月13日～19日・鶴屋百貨店ホール）で公開されたが、多くは「未公開」状態であった。

第一弾公開資料103枚中で新発見写真は90枚、全202枚中では同179枚である。

2 撮影部隊の概要

この撮影部隊は、米海兵隊第2海兵師団ノーマン・ハッチ少佐指揮下の「スチール写真班（2D MAR DIV PHOTO SELECTION）」と「映像班（2D MAR DIV MOVIE SELECTION）」の複数の撮影班である。 ※参考1（熊10-3）

撮影期日は1945年9月23日～11月10日で、部隊は長崎港に上陸後、市内各所で原爆被災状況を撮影しつつ長崎近辺（大村・島原他）へも出向いている。その後旧日本国有鉄道を利用し大牟田を経て、熊本へ到着している。

ムービー映像撮影前には既存様式のキャプションボードが撮影されて、そこには撮影者、日付（date time）、最下段には撮影班「2D MAR DIV」等を記載、現地情報がそのまま記載されている。但し、天草下島を撮影した部隊は調査中である。

一方、写真資料は現地撮影後で本国帰国後で整理されている。専用パンチカード方式台詞に該当写真を貼り付け、タイプ打ちして収納している。台紙には通し番号例「137337」等が、手書き文字・番号例「127-GW-1542」等が記載されており、これは米国立公文書館の分類である。

具体例として「RG127-GW, Photographs of World War II and Post World War II Marine Corps Activities, ca. 1939-58」等である。

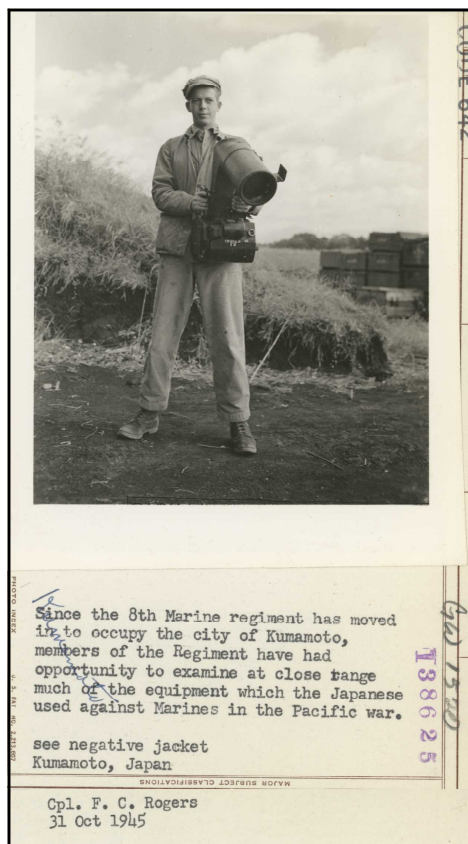
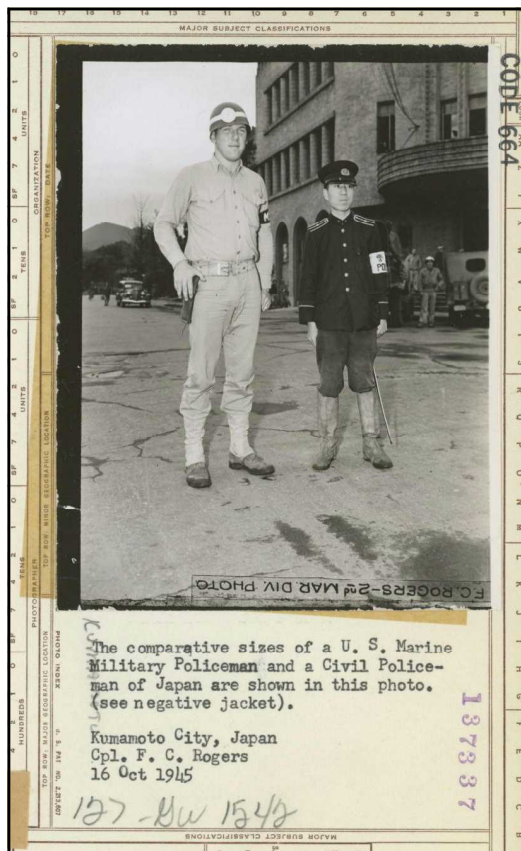


写真1（熊10-3） 「熊本市公会堂の米兵MPと日本人巡査」 進駐軍軍政部のおかれた熊本市公会堂（現市民会館）前で交通整理中の日本警官・オメダアラタ氏と米MPのハンター氏である。

写真2（熊10-5） 第2海兵師団での原爆被災調査班員
撮影は「F. C. Rogers」、所属は「2nd MAR. DIV. PHOTO」班

Ⅲ 熊本県内各地の状況

1 天草海軍航空隊・富岡水尻砲台 他

(1) 天草海軍航空隊基地の概要

天草海軍航空隊は天草市佐伊津に所在する。「佐伊津・御領」飛行場の別称があり、水上機専用の飛行場(註4)である。旧通信省天草地方航空機乗員養成所(海軍系)として、開所準備が完了したところで、全施設を海軍が接收。昭和19年3月に第十二連合航空隊博多海軍航空隊天草分遣隊として当初は整備教育隊として発足したが、その後は水上機操縦の教育も行った。昭和17年頃より地元中学生や住民の勤労動員、徴用された朝鮮の人々も建設に投入された。

その後昭和20年3月1日、天草海軍航空隊として独立、第5航空艦隊第12連合航空戦隊に編入。保有機は米軍への引渡目録によれば九三式水上中間練習機36機、九四式水上偵察機3機、九五式水上偵察機15機、零式水上観測機7機、二式水上戦闘機3機の計64機であった。5月5日練習航空隊の指定を解き、第5航空艦隊第12航空戦隊の所属となった。

昭和20年の沖縄戦においては第一次攻撃隊が5月24日2機、第二次攻撃隊が6月21日に5機、7月3日に1機の零式水上観測機での特攻作戦を実施し14人が戦死されている。

本部跡の高台には、沖縄作戦で亡くなった隊員の「特攻慰霊碑」が戦後まもなく結成された「天空会」により、1973(昭和48)年に建立されている。

(2) 富岡水尻砲台の概要

富岡半島の北端の四季咲岬公園・富岡灯台に向かう狭い道を海まで進むと、道路横の民家庭先に隠れるようにしてコンクリート製の海軍海面砲台が現れる。この地富岡は、近世以降天領支配の中心となった土地で、富岡城の築城をはじめ、その要害の地形から、戦争中は海軍砲台指揮本部・水尻海面砲台・元袋震洋基地・防空監視部隊(甲・特設見張所)と陸上守備の独歩第七五七大隊が配置され、お互いに有機的に連動要地防衛(註4)を行っていた。

1号砲台はコンクリート敷設で四十五口径十一年式十二糎(センチ)砲が1門設置され、天井部に砲設置時の鉄輪3個が残され、奥右側面には出入り口も設けられている。

2号砲台はさらに20m程上がった崖面に素掘りで壕内部を松材で補強して設置された。その中間地点には弾薬庫と兵器庫が同様の構造で、L型に屈曲させ、壕が掘削されたが、現況は痕跡も残されていない。

その当時の事をよく知る1号砲台横の住人の故松本高八さんは「砲は沖の船から小舟に乗せて、付近の住民総掛かりで陸にあげたと。終戦になって、進駐軍が来て、ダイナマイトを仕掛けて爆破しにこらした。上の砲は一発で壕ごとひしゃげてしまったばってん、下の砲は壊れんじやったけん、2回目は砲にダイナマイトを巻き付けて爆破させらした」と証言された。

2号砲台の上位の畑地は観測用の測距儀と対空用の25mm機関銃も上段の平場に設置され、砲員60名が寄宿する三角兵舎も付近の道沿いに造営された。記録では第一〇三分隊白庄司清少尉部隊と想定される。

(3) 撮影概要と接收状況

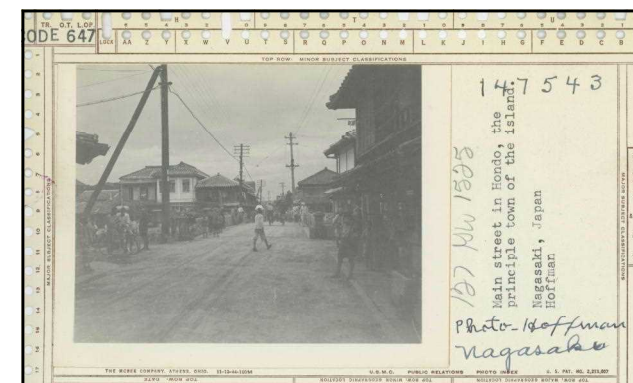
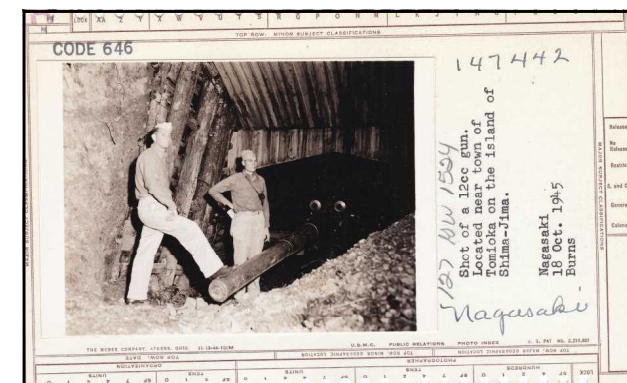
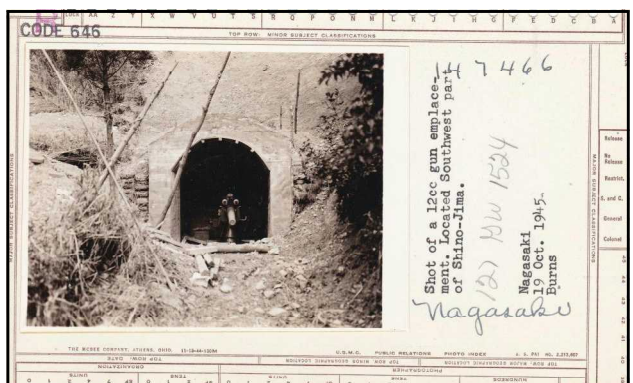
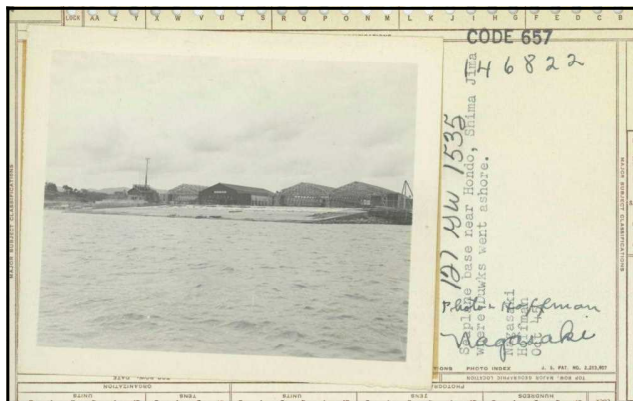
本項撮影資料21枚の内訳は、本渡町内2枚、天草海軍航空隊11枚、富岡水尻砲台4枚、鬼池・四十七糎砲各1枚である。ただし写真3・4(天-1・2)は、天草下島渡海前の長崎県南島原市口之津町での撮影である。

撮影された期日は、1945年10月18日である。

天草海軍航空隊に関しては、写真5(天-3)は天草海軍航空隊施設の全景を写した初めての写真で、しかも海からの貴重なカットである。現存するスリップ状況、格納庫4棟の配置と併せ前線指揮所構造等も理解できる。写真6(天-5)の格納庫内への九五式水上偵察機の接收前状況写真に代表される様に、これら飛行機部品等接收前状況の一連写真は貴重である。アジア歴史資料センター蔵『天草海軍航空隊引渡目録』との突き合わせ作業で、一連の米軍接收作業状況が想定できる。

また、本土決戦のため設置し、一部が現存する「富岡水尻砲台」関連写真・写真7・8(天-9~12)は、地元での過日証言とも整合する。熊本県内で来たるべき本土決戦準備に向け、海峡封鎖を目的とした、平射海面砲台の構造を理解することができる。





- 写真3 島原口之津駅前での海兵隊DUKWS
- 写真4 林田旅館前のDUKWSと搭載のジープ
- 写真5 天草海軍航空隊基地の海からの全景
- 写真6 格納庫収納の九五式水上偵察機
- 写真7 富岡水尻1号砲台の全景
- 写真8 富岡水尻2号砲台の米兵と接收様子
- 写真9 天草市本渡の町山口川と本渡橋

写真3（天-1）は、島原鉄道口之津駅前・林田旅館前での撮影で、当時波止場の前でもある。早崎海峡は全4.2km、当時の機帆船（880ト程度）で、約40分程度で対岸の鬼池港まで達していた。写真4（天-2）は、海兵隊水陸両用車（DUKWS・通称“アヒル”）に、附属の起重機を使い「半島を離れる（渡海前）にジープを搭載」している様子である。

2 菊池飛行場

（1）菊池飛行場の概要

菊池飛行場は菊池市花房富の原に所在する。花房・隈府飛行場の別称あり。昭和15年4月開隊し、同年8月大刀洗陸軍航空支廠菊池分廠を設置。同年10月には大刀洗陸軍飛行学校菊池分教所を設置し、後の昭和18年12月には同菊池教育隊に改称。昭和16年1月、第三航空教育隊・西部第九九部隊が移駐し、航空兵教育を実施し、防衛警備も担当。昭和19年4月には陸軍航空通信学校菊池教育隊が開隊し、菊池陸軍病院第一飛行集団に所属し、菊池気象観測所を配置（註4）する。

本飛行場は熊本県最大の陸軍基地で、多くの実戦部隊が配置される。昭和16年9月に第一〇六教育飛行連隊（中部第115部隊）～17年4月、昭和17年5月に第一〇三教育飛行連隊（西部第一二七部隊）～18年9月、昭和19年3月には第三教育飛行隊と改称、昭和17年12月に西部軍直協飛行隊（西部第一二七部隊）～18年9月が中心となった。昭和20年5月13日に空襲を受け、多くの建物は焼失したものの、昭和20年7月、第三十戦闘飛行集団の配当飛行場となり、特攻中継基地に変貌する。敗戦時は、第二二九飛行場大隊（靖第一九三八八・昭和20年4月編成）、第五五飛行場中隊（靖第一八四六四・昭和19年4月編成）が配備される。

飛行場東側の教育隊・実戦部隊区画には、全高16mの給水塔1基が現存。門柱6、立哨所基礎1、木製大型格納庫基礎1、鉄骨小型格納庫基礎1、大型油脂庫1、小型油倉庫1、兵舎等建物基礎10～15が遺存。また、飛行場西側の通信教育隊区画には風呂場1、便所2、円形防火水槽4、酒保門柱6等が遺存。さら

に、台地崖面には多数の防空壕、菊池市飛熊には航空支廠菊池分廠の大型格納横穴壕2基が遺存する。

(2) 写真概要と接收状況

菊池飛行場では撮影資料26枚の内訳は、戦後開拓風景2枚、各種飛行機5枚、格納庫・油庫等4枚、機銃・爆弾・用品等15枚である。これらのなかで熊日情報ライブラリー所蔵資料と重複する8点をのぞき18枚が初資料である。なお、菊池飛行場では、16mm映像は確認(註5)されていない。

撮影された期日は、開拓風景2枚を除き1945年10月22・23・26日である。

写真10(菊-22)は、現存する大型油脂庫の全景である。前面の黒色対空迷彩には機銃弾等の痕跡が明瞭に残り、耐爆性を高める、施設全体への盛土が見える。写真11(菊-25)では「九二式対空機銃」の接收様式が見てとれる。その他250kgを初めとする各種爆弾、物資用落下傘、航空無線等の機器・道具類の接種状況がある。写真12(菊-7)は、菊池飛行場で戦後唯一遺存した管理区画南側の木製大型格納庫内に集められた航空装置、機銃、弾薬等である。写真奥面には、天井部の湾曲したの構造や左側にコンクリート基礎部材に固定された木製梁等の建築材が見える。写真13(菊-20)は、同格納庫の正面扉側が撮影されており、こちら側には、航空機部品の様な資材が集められている。

なお写真14(菊-16)・写真15(菊-26)は、熊日新聞社、各雑誌等で公開されている写真である。

前者は、熊日情報ライブラリー「占領下の熊本(占5一下段)菊池飛行場」のもので、「九五式中間練習機の特攻仕様機」である。全体は深い草色もしくは黒色で、後部座席にはガソリンに油脂を混ぜたドラム缶を搭載している。写っているのは「九六振武隊機」で尾翼には桜に「と」「薫風」銘が見える。後者は、熊日情報ライブラリー「占領下の熊本(占5上段)菊池飛行場」のもので、菊池飛行場で接收される飛行機である。中央の複葉機は全て中練特攻機で、左側には九九式襲撃機、九九式双軽爆撃機が見える。中央奥には九七式輸送機等が遠望される。

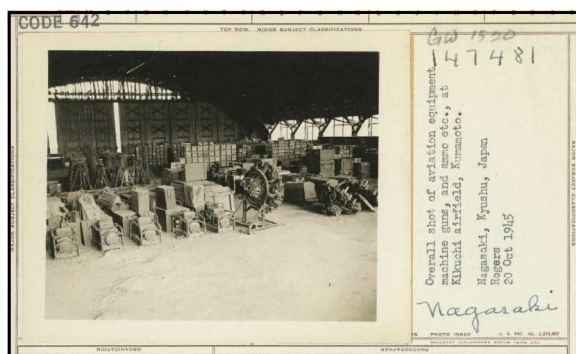
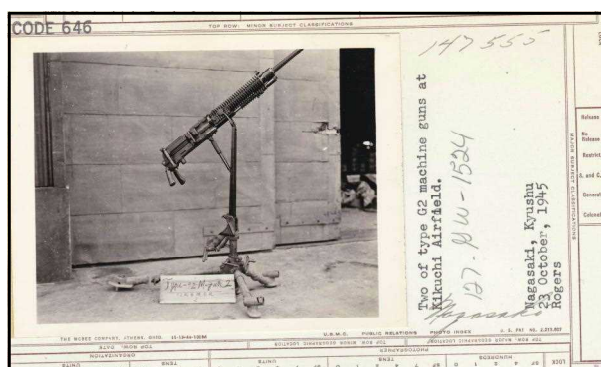
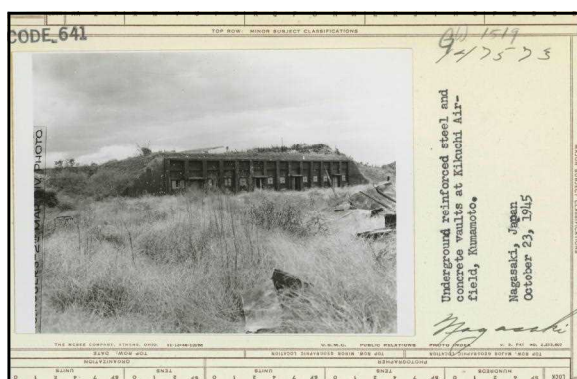


写真10 菊池飛行場管理区画南側の油脂倉庫の全景 ※現存。民間で利用

写真11 接收される格納庫前の陸軍九二式機関銃・対空砲架

写真12 大型木製格納庫内の接收機銃等

写真13 同庫内の航空機機材等

写真14 駐機する九五式中間練習機の特攻仕様機「薫風」隊機 ※公開資料

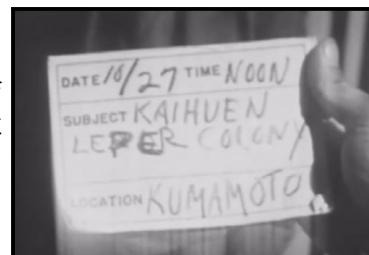
写真15 菊池飛行場で接收される飛行機群。中練特攻機、九九式襲撃機、九九式双軽爆撃機等 ※公開資料

3 菊池楓恵園

(1) 菊池恵楓園の概要

菊池恵楓園は、1909年（明治42年）九州七県連合九州癩（らい）療養所として開設された。1911年（明治44年）に県知事訓令により九州療養所に改称、さらに1941年（昭和16年）に国に移管されると同時に「国立療養所 菊池恵楓園」へと名称をあらため、現在に至っている。菊池恵楓園の総面積はおよそ約18万坪、園の周囲は3.9kmにおよび、日本最大のハンセン病回復者の国立療養所（註6）として知られている。

これまで米進駐時での菊池恵楓園16ミリムービー映像2本（長崎ケーブルメディア映像・昭和館映像）、白黒写真が確認されている。



映像2 菊池恵楓園のキャプション

(2) 映像概要と接收状況

ここでの16ミリ撮影は①カット29秒・②カット20秒・⑦カット39秒・⑫カット14秒・⑬カット11秒・⑭カット17秒の計130秒である。撮影は10月27日、写真は10月23日もあり、敗戦後間もない菊池恵楓園の映像記録化が目的と想定される。今回の映像には菊池恵楓園家族舎縁側での11名の少年集合の様子、西側農園での農作業中の入所者の様子（映像3）、家族舎南側縁側の様子、恵楓学園の門・看板・小学生用平屋建物の様子（映像4）、146畳敷き大広間のある公会堂（映像5）、菊池恵楓園英字看板・正門の様子（映像6）、看板に「国立癩療養所 菊池恵楓園 National Leprosarium Kikutikeihuen」（映像7）と書かれている。旧々事務本館では米兵と宮崎松記園長・下瀬初太郎看護部長らの談話シーン（映像8）も写されていた。



映像3 西側農園での農作業の様子

映像4 恵楓学園の看板と平屋建物

映像5 公会堂、南側から撮影

映像6 菊池恵楓園事務所棟と看板

映像7 英字で書かれた事務所前の「菊池恵楓園看板」

映像8 菊池恵楓園来所した米兵と談笑する宮崎末記園長

(3) 写真撮影

菊池恵楓園撮影資料10枚の内訳は、家族舎棟2枚、恵楓学園内部2枚、入所者5枚の計10枚である。撮影された期日は、1945年10月23日と記されるが、映像キャプションから「27日撮影」と想定できる。

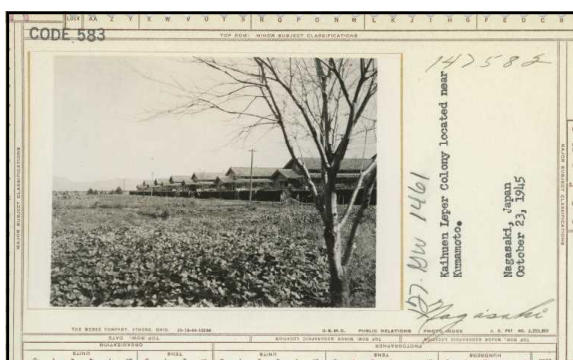




写真16 家族舎棟の患者農園側からの遠景
写真18 恵楓学園教室の内部様子



写真17 家族舎の全景
写真19 同教室での宮崎松記園長と米兵

写真16・17（楓－2・3）は、西側患者農園から見た家族舎棟全景と南側からの家族舎棟の南側拡大写真である。写真18（楓－6）は、恵楓学園教室内の撮影で、入所の子どもの写真である。写真19の正面立位と写真18の後姿の白衣の人物は連続写真からして宮崎松記園長である。最前列左端の男子、その後ろ女子、最奥部女子は別ムービーにも姿が見える。なお、右奥の建物は別棟の屋外便所で、その後建物は3回ほど増築されている。写真19（楓－9）も恵楓学園教室内で、男子児童と宮崎松記園長、米兵の様子である。最前列男子児童の検診の様子であろうか。

4 健軍（熊本）飛行場

（1）健軍飛行場の概要

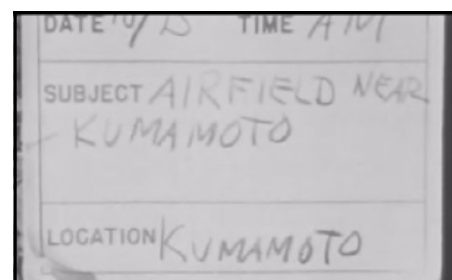
健軍飛行場は旧熊本飛行場は熊本市東区健軍町・西原町・戸島町・小山町に所在する。健軍飛行場の別称を持つ。当初は三菱重工業株式会社熊本航空機製造所で生産する重爆撃機「飛龍（キ－六七）」試験飛行のための飛行場として設営（註4）された。

旧熊本飛行場は熊本市東区健軍町・西原町・戸島町・小山町に所在する。健軍飛行場の別称を持つ。当初は三菱重工業株式会社熊本航空機製造所で生産する重爆撃機「飛龍（キ－六七）」試験飛行のための飛行場として設営された。

昭和19年4月「飛龍第一号機進空式」時には飛行場諸施設も南・西側に完成し、同6月大刀洗陸軍飛行学校熊本教育隊が、飛行場東側に管理区画を設け開校する。その後大刀洗飛行学校の廃校に伴い、実戦部隊の配備も行われ、昭和20年4月、重爆隊の第六十戦隊の配置に伴い機能が更に拡充する。昭和20年5月の義号作戦では、沖縄に向け「義烈空挺隊」の発進が当飛行場から行われた。昭和20年7月、第三十戦闘飛行集団の配当飛行場となり、敗戦時は第六〇戦隊（陸軍重爆隊、その後は百十重爆撃隊と統合し、百七十戦隊に編制替）、第一七独立飛行隊、第五五飛行中隊、第一七四飛行場大隊の配備部隊名が記されている。

滑走路は、現日本赤十字熊本病院前道路として1500×60m（マカダム舗装）を基盤とし、さらに1500×300・1500×200mの2箇所を設定する。周辺誘導路としては、3000m長が20本設置され、周囲には500名収容の宿舎12棟と軍記録に記されている。

飛行場南部隣接の三菱熊本航空機製造所には、全長200mの第二組立工場が、陸上自衛隊西部方面総監部内補給支廠建物として現存し、義烈空挺隊慰霊碑も陸自施設内に移転されている。また、第六十戦隊の墜落機慰霊碑が天津町外牧畑、西原村宮山の2箇所に建立されている。



映像9 健軍飛行場撮影キャプション

（2）映像概要と接收状況

健軍飛行場の接收時に、部隊に随伴して撮影されたスチール写真がこれまでに知られており、熊本日日新聞社総合メディア局データベース部に9枚が保管されている。この写真は、今回発見された16ミリフィルムに撮影されたカラー映像で、駐機する第百七十戦隊飛龍列機（映像1）や横全景は撮影位置もほぼ合致する。

ここでの16ミリ撮影は⑧カット37秒・⑨カット39秒・⑩カット20秒の計116秒で、健軍飛行場での施設接收状況、飛行機・武器類の接收・遺棄・破壊状況の撮影が目的と想定される。映像撮影は10月15日、写真は10月14日もあり、映像には陸軍四式重爆撃機「飛龍」横シルエット（映像10）や第一七〇戦隊の列機が金峰山系を背景に並んだ様子（映像1）、飛龍機首部と機銃装備を装備し完全武装状況（映像11）、百式指令部偵察機発動機拡大状況（映像12）、百式輸送機と百式司令部偵察機の駐機（映像13）、白地に緑十字旗マーキングした百式輸送機と米軍ジープ映像（映像14）が確認できた。



映像10 健軍飛行場で接收された旧陸軍爆撃機「飛龍」全景、
映像11 完全武装の飛龍機首部
映像12 百式司令部偵察機の機首部
映像13 百式輸送機（手前）、百式司令部偵察機（右奥）
映像14 緑十字マーク記載の百式輸送機と米軍ジープ

(3) 写真撮影

健軍飛行場の接收時写真は、各種飛行機15枚、各種機材・用品等16枚、焼却様子7枚、計38枚である。新発見は33枚となる。撮影は1945年10月4日・15日・23日・26日・11月20日である。16³、映像は長崎ケーブルメディアの一本が確認されている。

これまでの公開資料では、第一七〇戦隊の列機が金峰山系を背景に並んだ様子（映像3）や飛龍各機が一行に並ぶ写真22（健-22）、陸軍四式重爆撃機「飛龍」横シルエットの写真23（健-21）、飛龍機首部と機銃装備を装備し完全武装状況の様子、さらには接收機を集めガソリンをかけ焼却している様子等が知られている。

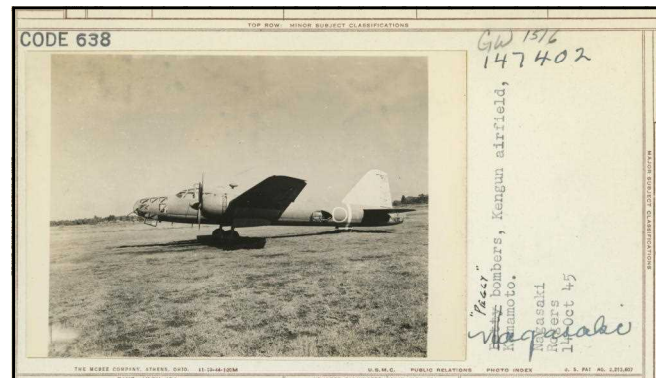
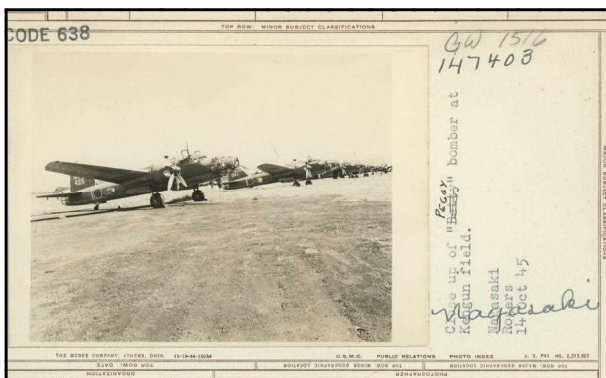


写真20 健軍飛行場での接收状況 遠景

写真21 緑十字マーク記載の民間輸送機

写真22 陸軍四式重爆撃機「飛龍」列機 ※公開資料

写真23 完全武装の第一七〇戦隊「飛龍」 ※公開資料

写真20（健-23）は、飛行場東側での日本軍飛行機の列機撮影である。左列手前より一〇〇式輸送機、一〇〇式司令部偵察機、中央にも一〇〇式司令部偵察機が並ぶ。ただ中央の一〇〇式司令部偵察機は、武装強化型三型乙で、垂直尾翼にはかすかに消された調布飛行場配備時代の八咫鳥マークが見える。独立飛

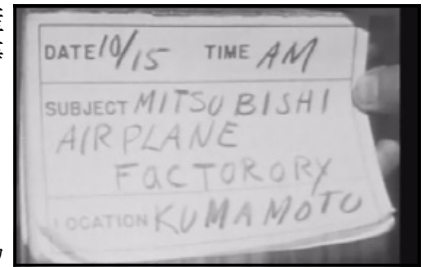
行第十七中隊機である。写真21（健-12）は、尾翼に「大日航」「43」機首に社マークの描かれた大日本航空の民間機である。機体各所には白背景で緑十字が描かれている。マニラから飛来した平和特使機と説明される。機体は陸軍一〇〇式輸送機を民間に転用した「三菱MC-20」機である。長崎ケーブルメディア映像には、本緑十字旗百式輸送機と米軍ジープが映り込む映像もある。

5 三菱重工業熊本航空機製作所

（1）三菱重工業熊本航空機製作所の概要

1941年9月陸軍航空本部では三菱重工業に対し、大型機の月産50機生産の拡充命令を出した。1942年6月15日名古屋航空機製作所の最新配置図等を用い、熊本市近隣で最も敷地的にゆとりのある健軍に起工されたのが三菱重工業熊本航空機製作所（註4）である。

三菱重工業所内では機体を生産する第九製作所と称され、兵器等製造事業特別助成法による官設民営の工場として建設、略号「カミク」（官設・民営・熊本工場）とも呼称された。計画書によると主工場40万坪、飛行場100万坪、寮・社宅等厚生施設40万坪である。物資を搬出入する為に国鉄水前寺駅より工場まで専用鉄道軌道を敷設し、引き込み線から荷揚げされた部品等は南側の各種倉庫毎に管理された後は、二系列で北側の板金・機械・工機工場を経て部品組立工場へと進み、併設された健軍飛行場にある整備工場へと至り、ここで試験飛行、最終検査・引き渡しが行われた。当地での用地買収は陸軍が直営で行い、設計及び工事監督は三菱地所が、飛行場造営は西松組、工場建物は竹中組、厚生施設等は大林組が各々担当した。第一期工事（昭和17年度）では、工機工場・钣金工場・機械工場・各種倉庫等並びに名古屋航空機製作所からの基幹工員等の社宅建設、昭和18年には青年学校の建設を行った。第二期工事（昭和18年度）では、部品組立工場・第一組立工場・木材工場・第一事務所等並びに職員や工員の社宅、厚生施設の建設が進められた。昭和19年には第二部品工場、不足倉庫の追加工事等が進められ、第○図に示すように、総組立工場をはじめ必要に応じてまだまだ増設できる敷地だけは十分に確保されていた。また水道（健軍水源地内の深井戸五基、集水井二基、汲上げポンプ三基、貯水槽等）施設の設置、電気ガス（九州電力・西部ガスによる施工）等の附帯施設建設も進められた1944年4月29日には、三菱名古屋で完成した機体を一旦分解し、熊本に運び再度組み立てた四式重爆撃機「飛龍」（キ一六七）一号機の進空式が行われた。熊本製作所で敗戦までに46機（一部資料は42機）の飛龍が誕生した。なお、本工場は1945年5月頃より防諜上「報国熊第一〇一一工場」とも呼称された。



映像15 三菱重工業熊本航空機製作所のキャプション

（2）映像概要と接收状況

これまで米進駐時工場接收等のスチール写真・映像1本（長崎ケーブルメディア映像）が残されている。

ここでの16mm撮影は③カット29秒・⑪カット39秒の計67秒で、熊本航空機製作所の敗戦時状況の撮影が目的と考えられる。映像撮影は10月15日と想定でき写真は10月26日もあり、映像16には北側の龍田山の緩やかな山系が背景にあることから、給水塔や小規模建物群・長尺工場建物は木工場と想定される。映像17・18には、工場南側を撮影したと想定され、背景には飯田山が写り長尺工場建物・3本の煙突が近接する建物が確認された。



映像16 三菱熊本航空機製作所喜北側建物の様子。背景は金峰山



映像17 同南側の長尺建物の様子。背景は飯田山山系



映像18 工場南側建物の様子

（3）写真概要と接收状況

熊本航空機製作所の接收写真では、工場建物6枚、解体高射砲2枚の全8枚、新発見8枚である。映像・写真撮影ともに、10月15日である。

写真20（三-8）は、熊本航空機製作所建物の拡大で、建物規模的に最大建物である第一組立総工場と想定できる。現在、本建物は、陸上自衛隊健軍駐屯地健軍支処の整備工場として利用されている。写真21（三-3）は、三菱熊本航空機製作所及び健軍飛行場の近くの高射砲（A.A. Guns）8門「8th

Co Fujikawa A.A. Unit」である。3箇所あつた高射砲陣地（健軍神社高台・生協くまもと店舗後背高台・旧戸山外科裏高台）の砲の一部が集められる。砲身は既に取り外されている。



写真20 三菱熊本航空機製作所の第一組立総工場の全景

写真21 施設を防御していた高射砲接收状況

IV まとめ

戦後77年を迎え、7月の第一弾報道公開の後、当地熊本では今回の「公益財団法人 長崎平和推進協会 写真調査部会」から提供いただいた写真新発見写真を中心に、熊日新聞社紙上で「くまもと戦後77年 米軍写真から」として、報道紹介が逐次で行われている。

12月初旬には第二弾として継続して公開する予定である。第二弾公開資料には、写真22（熊10-1）の様に、熊本の街中での米兵写真撮影も含まれる。この写真は、写真23『一億人の昭和史 日本占領 2』表紙を飾った著明なカットではあるが、これまでは撮影内容がよく分からないものであった。今回の白黒該当写真の発見により、熊本市内の旧町屋での米兵撮影カットの全容が初めて確認できた。これからは長崎ケーブルメディア映像・昭和館映像との資料突き合わせの元に、丁寧な検証を進めていきたい。

長崎ケーブルメディアで公開されている16ミリ映像の大部分は、長崎原爆投下後最も早い45日目の被爆初カラーフィルムである。さらに今回紹介する熊本関係資料は、それに付随した副次的な物で収録時間は短い、敗戦後の熊本を記録した貴重なスチール写真と16ミリカラーフィルムである。

以下3項目で熊本に関する映像・写真資料の歴史的意義・価値を示す。

- ①16ミリカラー映像と白黒写真は「戦後熊本の敗戦状況」を記録した貴重な資料の発見である。16ミリカラー映像では長崎ケーブルメディア映像と昭和館映像の2本が確認できた。
- ②白黒写真では、これまでは全く確認できていなかった「天草海軍航空隊・富岡水尻砲台等」接收の初資料である。天草下島地区については、島原半島から渡海し部隊が接收した状況が想定できた。
- ③白黒写真の既公開資料として「菊池飛行場・菊池恵楓園・健軍飛行場・三菱重工業熊本航空機製作所・三角港爆弾等投棄・市内航空工場等」が部分的に確認されていたが、本写真・映像資料により、さらなる空襲被害状況、施設の接收状況、菊池恵楓園入所者状況、飛行機・武器類の遺棄での新たな確認ができた。

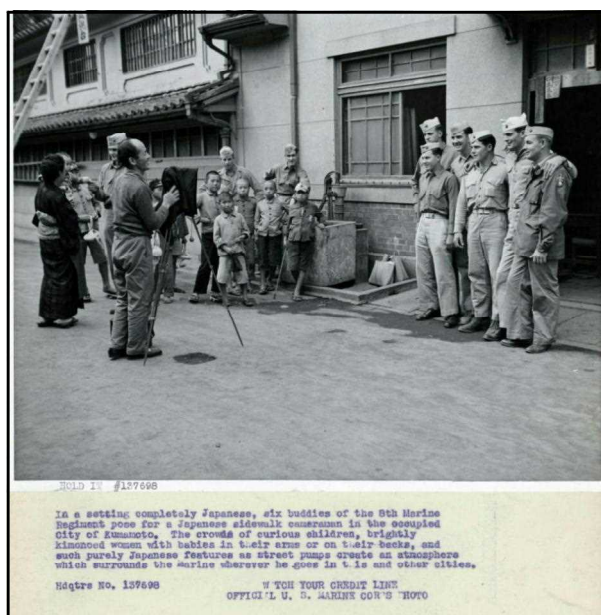


写真22（熊10-1） 熊本の街中での米兵写真撮影

写真23 『一億人の昭和史 日本占領 2』表紙 毎日新聞社

〔 註 記 〕

註1 高谷和生「米進駐軍が見た敗戦後の熊本カラーフィルム」『歴史玉名 第96号』玉名歴史研究会 2021

註2 これら一連のNCM長崎ケーブルメディア「ながさき原爆記録全集 第56回特別版」は、2020年ギャラクシー賞テ

レビ部門奨励賞を受賞している。この一連の番組は、映像部門・テレビ部門で数々の受賞を受けている。この映像は長崎原爆投下後最も早い時期に撮影された貴重なカラーフィルムで、NCMで「ながさき原爆記録全集」として、2016年の被爆70年の年から、毎月約1本30分原爆番組が放送されている。2020年には第60回の放送を行った。

- 註3 「昭和館」では、熊本関係映像「熊本の街並み風景 その他」を、館内でのみ放映されている。
- 註4 高谷和生『くまもとの戦争遺産』熊日出版 2020
- 註5 高谷和生「菊池飛行場の写真資料」『歴史玉名 第84号』玉名歴史研究会 2018、高谷和生「菊池飛行場の日米写真一覧」『歴史玉名 第85号』玉名歴史研究会 2018
- 註6 啓発リーフレット『進駐軍が見た熊本』くまもと戦争遺跡文化遺産ネットワーク 2021

番号	撮影箇所	手書きキャプション・subject	撮影者	日付 date time	撮影概要・スチール写真等比較	時間・秒	映像カット
①	菊池恵楓園家族舎	判読困難	不明	不明	菊池恵楓園西側家族舎緑側での11名少年撮影 ※恵楓園教室内写真2枚に同児童達のカットあり。また、昭和館所蔵資料内には少女撮影あり	29	映像-1
②	菊池恵楓園家族舎	GARDONS BARACKS	不明	10/27 Noon	農作業男性16人。手前に女性2名。西側家族舎群、西側畑地・いも畑 ※家族舎全景・近景の2枚写真もあり	20	映像-1
③-1	三菱重工業熊本航空機製作所	mitsubishi AIRPLANE FACTORY	不明	10月15日	—	—	
③-2		16 8TH MAR KUMAMOTO	e.g.wilbert	未記載 10/15か	小規模建物群・北側木工場と想定。背景は市北方位の立田山丘陵	29	映像-16
④	三井染料大牟田工業所軍楽隊	19 B CO AMUTA	e.g.wilbert	未記載	三井染料軍楽隊、平島松敏氏による指揮。部隊歓迎演奏を正面位置からの撮影	41	
⑤	長崎港	なし	不明	未記載	長崎港への入港と想定。APA34・米国ベィフィールド級攻撃輸送船「フェイエット」。除隊資格のある軍人の帰還風景と想定できる。湾内タグボート	19	
⑥	三井染料大牟田工業所軍楽隊	20 B CO AMUTIA	e.g.wilbert	未記載	楽団指揮・演奏。背景建物は三井染料大牟田工業所本部建物（2階建てRC）と想定	26	
⑦-1	菊池恵楓園事務本館建物	20 KUMAMOTO	e.g.wilbert	未記載 10/27 7か	—	—	
⑦-2		KAIHYEN LEPORA COLONY KUMAMOTO	不明	10/27 noon	菊池恵楓園看板・正門。「国立療養所 菊池恵楓園 national leprosarium kikutikeihuen」米兵と職員か。旧々事務本館と米軍ジープ。宮崎松記園長・下瀬初太郎看護部長。 ※他に男性患者6名上半身の写真あり	39	映像-7・8
⑧-1	熊本（健軍）飛行場	16 8TH MAR KUMAMOTO	E. G. WILBERT	未記載 10/15 5か	—	—	
⑧-2		AIRFIELD NEAR KUMAMOTO	不明	10/15 am	陸軍四式重爆撃機「飛龍」横シルエット。第一七〇戦隊カラーリング。背景には「金峰山」であり、滑走路横で撮影。	37	映像-10
⑨	熊本（健軍）飛行場	JAP SCOOT PLANES	不明	10/15 am	手前は陸軍百式輸送機。百式司令部偵察機発動機の拡大。飛龍機首部に機銃が装備され、完全武装状態。引渡時の撮影と想定。	39	映像-11
⑩-1	熊本（健軍）飛行場	16 KENGUN AIRFIELD	E. G. WILBERT	未記載 10/15 5か	—	—	
⑩-2		PEACE ENJOY PLANE	不明	10月15日	陸軍彩色百式輸送機胴体に白ベースに緑十字旗マーキング。機体の手前には米軍ジープ	20	映像-14
⑪	三菱重工業熊本航空機製作所	mitsubishi AIRPLANE FACTORY	E. G. WILBERT	未記載	長尺工場建物。3本の煙突。背景には南側の飯田山。更に小規模建物も撮影	38	映像-17
⑫	菊池恵楓園家族舎	23 C.T.8 KUMAMOTO	不明	未記載	女子家族舎建物。庭先で家事をする女性と男性・子どもの計3名、茶の生垣が見える。	14	
⑬	菊池恵楓園恵楓学園	判読困難	不明	10/27 noon	菊池恵楓園内北側の恵楓学園の門・看板・建物。東恵楓学園教室内写真2枚カットも確認	11	映像-6
⑭	菊池恵楓園礼拝堂	TEMPLE IN LAPORE COLONY		10/27 noon	菊池恵楓園の北側礼拝堂	17	映像-5

第1表 第2海兵師団カラー撮影の熊本地区一覧表：長崎ケーブルメディア映像（長崎港・大牟田含む：7分31秒、熊本関係全体：5分21秒）